

巻頭言

アジアの旅で思ひつと

村山節子

ワーカーズコープ
キュービック

コープで国際交流活動に参加して、15年になる。組合員が集めたユニセフ募金が、どのように使われているのか、現地に行って確かめたいと思い、はじめたアジアの旅である。中国、ネパール、フィリピン、ベトナム、シンガポール、マレーシア、カンボジア、韓国、ミャンマーへ行ってきた。どの国でもユニセフやNGOは農村女性の経済的自立や子供たちの健康管理の支援をしていた。補助金を渡すのではなく、豚や鶏を飼うための資金の貸し付けをやり、利益が出たら返済し、次の人に貸付をする。牛銀行、米銀行、豚銀行などと呼んでいる。協同組合で運営しているところもある。

雨季や乾季のある国では、乾季の水の確保は重要課題である。川の水を山の上まで運ぶ女性や子供の姿はどこにでも見かける。子供は立派な働き手だ。

ネパールでは標高1500mの高地で農業をやっている村を訪問した。桑畑、稲作で暮らしていた。子供たちは学校へ行かないで大人と一緒に働いていた。村には学校がなく何時間も歩いて町にいかなければならないからだ。村では水汲み場がありみんな瓶を持って水汲みにいく。電気もないので小屋のような家は昼でも薄暗い部屋で暮らしている。ユニセフでは定期的に保健指導員を派遣して母子の栄養指導や予防注射の説明を絵で行っていた。文字が読めないからだ。カースト制があるため貧富の差はとても大きく、階級の下の人たちはあきらめているように見えた。

ベトナムの農業はとても元気で生き生きとした。女性委員会と呼ばれている組織がユニセフから委託されているいろいろなプロジェクトを開発していた。豚の飼育、鶏の飼育、野菜の栽培、の指導、これも子豚を買う資金の貸し付けと返済の指導、ゴザの製造などもある。出産、育児に夫の協力を要請するジェンダー教育など、寸劇を見せて楽しく学習していた。平野部では灌漑用水もあり稲作が三毛作で作られ米は輸出されている。

このような豊かそうな農村のくらしでも電気は十分ではなく家中は土間にベッドがあるだけで家具はない。トイレも台所も外の小屋にあった。

カンボジアは内戦の傷跡がまだまだ深く、地雷で負傷した大人と子供にたくさん会った。JVCの農村開発プロジェクトの活動を見学した。乾季にはほとんど水のない村で井戸堀、溜池づくりを指導して、野菜の栽培、米づくりを試しながらの研究だ。この村では子供たちはパンツもはかないで真っ裸、家にはトイレもなくなれたがしだった。衛生管理など考えていないようで、トイレを作ることの

重要性も、説明していた。

持続的農業ができるようにトレーナーの養成を行い、米銀行などの共同体活動支援で、村人たちが自立して安定した生活ができるように支援している。持続的農業は生態系や人の健康を傷つけないように農薬や化学肥料をつかわないで堆肥や緑肥を資源とし、自然の力を最大限に利用する農業のことである。

今年3月に訪れたミャンマーは軍事政権で非民主的な国と思っていたが、市民は政府に反対するようなことを言わないかぎり安定した生活ができていたので前より暮らしやすいそうだ。

1989年ビルマからミャンマーに、ラングーンからヤンゴンに呼称を変更した。ヤンゴンとは戦いの終わりという意味だそうだ。人口4173万人で85%が熱心な仏教徒である。面積は日本の1.8倍、70%ビルマ族、他135の少数民族がいる。仏教国の象徴というべき、パゴダや寺院を建立するのは大きな功德とされるため、国中にパゴダや寺院が現在も増え続けている。ヤンゴンの街では日本の中古バスが大活躍だった。神奈川中央交通、横浜市営、東武、関東、など日本名のまま満員の乗客をのせて走っていた。真っ黒い排ガスを撒き散らしながら。またトラックバスも市民の足で荷台に詰め込まれてぶらさがりながら乗っていた。米が主食で多彩なおかず類を一緒に食べるので日本によく似ていた。野菜、果物、が豊富で淡水魚、豚肉、鶏肉、豆腐、こんにゃくなどおいしく料理されていた。

ユニセフ事務所を訪問し広報担当の方から活動の様子を話していただいた。キーワードは水の確保、保健指導、教育ということだった。

次に孤児院を3箇所訪問した。最初に厚生福祉省の管轄の大きな施設に行った。7歳から18歳の女子135人が入っていて、勉強、手芸、刺繍、機織、ミシンかけなどをやっていた。自立できるようになれば 社会に巣立っていくそうだ。彼女たちの制作したものは2箇所のショップで販売されていた。教室や作業所、保健室などは薄暗く、目が悪くなりそうだ、心配になった。発電機があれば自家発電ができると校長先生はいていた。

二つ目はクリスチャンのNGOがイギリスの企業の援助で運営しているところにいった。男子だけ5歳から17歳の35人が生活していた。ここはストリートチルドレンだった子たちで、この家が窮屈になると出て行ったり、また戻ってきたり、自由にさせているそうだ。この日はサッカーの試合で優勝したということで賞品をもらって大喜びで盛り上がっていた。

三つ目は同じNGOの女子の施設だ。3歳から17歳の20人で小学校、中学校、専門学校に通っている子もいた。どの子も人懐っこく私たちにぶら下がったり、だっこされたりべたべたくっついてきて、なかなか離れようとしなかった。

今まで訪問した国々のほとんどは貧困な暮らしで衣食住の足りていない状態だった。それなのにどの国の人々も元気で希望をもち前向きに生きていた。日本の40年前の様子によく似ていた。私はアジアでの1週間から10日の旅の中で、とても癒され、リラックスでき、リフレッシュできる気持ちよさで、また来年も行きたいと思う。貧しくても元気な子供たちや青年たちに会って、日本の現状と比較し、若い人たちの生き方に疑問を感じる。携帯電話、メール、ブランドなど十分幸せを感じてほしい。こどもの虐待、殺人などどこかが狂っている。アジアでボランティアをやってみてはどうか。きっと生き方が変わると思う。